

実践報告

COVID-19 感染拡大期の生活行動回復看護論実習の展開と次年度への課題

岡本 杏華*・徳田 葉子*・井上 深幸*・田口 豊恵*

I. はじめに

2020年度、看護教育の集大成となる臨地実習は、COVID-19の感染拡大によって大きな影響を受けた。一般社団法人日本看護系大学協議会看護学教育質向上委員会によるCOVID-19に伴う臨地実習への影響調査結果(2020.12)では、専門領域別にみると臨地実習の日数・時間短縮ありの上位3位は、成人看護学282件(86.8%)、母性看護学157件(85.3%)、小児看護学157件(82.2%)であった。本学においても前述した調査と同様、実習の中止または、日数短縮や内容変更を余儀なくされた。このような中において、生活行動回復看護論実習では、9月に動画教材を臨床と協働して作成し、後期のリモート実習で活用した。本報では、コロナ禍における今年度の臨地実習の取り組み状況を報告するとともに次年度にむけての課題を明らかにしたい。

II. 臨地実習スケジュールの変更と コロナ禍における工夫

2020年度の生活行動回復看護論実習は、第一回緊急事態宣言解除後の6月に他領域との調整および実習施設の受け入れ期間から検討した結果、本学の方針により後期から開始することになった。しかし、緊急事態宣言や外出自粛解除後に経済行動が再開された諸外国において新た

な感染の拡大が報告されていることや、ミネソタ大学感染症研究政策センター(CIDRAP)による過去のパンデミックの状況を踏まえた研究報告書(2020.4)から、我国においても後期が始まる秋頃はCOVID-19の第二波感染拡大が懸念されていた。そのため、本来は8日間の臨地実習であるが、感染予防と学修機会の均等性の観点から3日間に短縮した。また、実習施設の受け入れ期間内に全学生の配置ができるように臨地実習の期間を1週目は3日間とし、1週目の1日目と5日目、2週目の2日間の4日間を学内実習とした。残りの3日間は、7月に統合学修として先行する形をとった。さらなる感染拡大により臨地実習が中止となる場合を想定し、臨地短縮型実習とリモート実習の指導案作成に取り組んだ。実習指導案作成において最も重要視したことは、臨地実習、リモート実習ともに学生が実習目標に到達できるように工夫することであった。例えば、実習目標2の「アセスメントに必要な情報を、患者や家族との関わりを通して意図的に収集できる」は、リモート実習でどのように到達させるのか、ペーパーペイシェントで提示した情報が記録用紙への転記にとどまらず意図的な情報収集ができないか検討した。そこで、リモート実習でも学生が自身の観察力で患者の全体像を捉えることができるよう動画教材作成の考案に至った。実習病院とは7月上旬にWebミーティングを設け、臨地短縮型実習内容と動画教材作成案を提示した。その後、指導者

*京都看護大学

と打ち合わせを実施し、実習病院の研究倫理委員会の承認を得た上で、9月中旬に動画撮影を進めることになった。動画内容は学生が回復リハビリテーション期にある患者の特徴を捉え、問題解決思考につながることを目的とした。動画撮影においては、患者およびスタッフのプライバシー保護に十分留意するよう事前に説明を行い、同意を得た上で実施した。撮影は食事動作、整容動作、移動・移乗動作、リハビリテーション場면을教員2名が別々のアングルから行った。学生が実際に臨地で患者を観察する際、患者を一方から観察することはせず、可能な限り多方向から観察しているからである。そのため動画においても患者を多方向からとらえることができるよう、教員2名でアングルを変えた撮影を行った。また編集においても、学生が臨地で観察しているような状況にするため、極力ズームや場面のカットはしなかった。最終編集時には、患者やスタッフの個人情報に遵守できていることを再確認した。このようにして、約15分の事例動画に加え約10分の回復期リハビリテーション病院の紹介動画を作成し、後期の実習開始を迎えた。しかし、本学の新型コロナウイルス感染拡大に伴う活動制限のガイドラインに則って進めた結果、11月中旬以降はリモート実習に切り替わった。

リモート実習では、グループ毎に全体討議や個別指導を組み込みながら指導を進めた。動画に映し出された生活の一部分から患者のニーズがどこにあるのか、障がいを持つ患者の生活行動の再獲得について考えられるよう支援し、個別性のある看護計画の立案を目指した。また、教科書や資料に基づき、回復リハビリテーション期の看護の特徴や看護師の役割の理解につながるように支援した。

Ⅲ. 臨地実習の展開と動画教材導入の効果

2020年度の生活行動回復看護論実習は、臨地実習を経験した学生が51名（京都近衛リハビリテーション病院36名、京都大原記念病院15名）、リモート実習となった学生が34名であった。この結果を踏まえて気になるのが、学生の実習目標到達度である。実習指導案作成において最も重要視した、臨地実習、リモート実習ともに学生が実習目標に到達できる工夫は、それぞれの実習目標到達度の差の有無により評価できる。そこで実習評価の平均点を比較したが、大差は認められなかった。

一方、ナーシングスキルチェックによる生活行動回復看護論実習の技術到達度の平均値は、「環境調整技術」「活動・休息援助技術」「清潔・衣生活援助技術」「呼吸循環を整える技術」「救命救急処置技術」「症状・生体機能管理技術」「安全管理の技術」「安楽確保の技術」の8カテゴリー16項目で、臨地実習を経験した学生よりリモート実習の学生の方が低い結果を示した。しかし、「活動・休息援助技術」の廃用症候群リスクのアセスメントと「与薬の技術」は臨地実習を経験した学生よりリモート実習の学生の方が高い結果を示した。この結果は、臨地実習を経験した学生が受け持った患者は、ADLが比較的高い方が多かったことと関連があるのではないかと推察している。

動画教材を活用したリモート実習の効果を明らかにするために学生へのアンケート調査を行った。結果は、「動画による情報があることで、事例患者のリアリティを感じることができたか」に対して、「とてもできた」33.3%、「できた」59.3%、「あまりできなかった」7.4%であった。「とてもできた」「できた」の理由は、『実際に臨地実習を行っているように、患者さんの様子やアセスメントに必要な情報を目で見て得ようとするのができたから』や『情報だけだとう

しても理解や想像しにくい部分があるが、映像があったことで対象の理解につながったため』などであった。「あまりできなかった」の理由は、『角度や、映像が荒いなどで、見えにくく感じる部分もあったため』や『動画での情報しかわからず、その人の全体像が見えづらいつと感じた』であった。「事例動画は看護過程を展開していくうえで役に立ったか」に対しては、「とても役に立った」33.3%、「役に立った」66.7%であった。理由は、『実際に日常生活やりハビリをされている様子を見て、看護計画をたてる時に個性を意識することができたから』や『様々な角度から撮影されており、どのくらい動ける人なのかなどの可動域がよくわかり、患者理解がしやすかったため』などであった。佐藤ら(2016)の研究においても、紙上患者教材よりもDVD教材での演習を受けた学生の方が患者の全体像を把握しやすかったことや妥当な看護診断の抽出割合が高かったことから、DVD教材での教育効果が高いことが明らかになっている。今回のリモート実習においても動画教材を用いたことにより、看護過程の展開に有効である可能性が示唆された。

一方で、「事例動画内に追加としてあれば、看護過程の展開に役立ったと思われた内容はあるか」に対しては、『コミュニケーション場面』の回答が最も多く、その他には『表情』や『更衣・清潔動作』といった回答があった。葛原ら(2013)は「コミュニケーション場面の視聴覚教材活用の効果は、学生の気づきから分析した結果、非言語的コミュニケーションや対象の反応を捉える視点に気づき、生活機能障害を持つ高齢者などの心理に対する理解を深めることに繋がる効果がある」と述べている。今回のリモート実習においても、学生が実際に患者にかかわることができない分、学生が患者の心理に対する理解を深めることができるよう、患者の思いが汲み取れる場面が必要だったのではないかと考えられ

る。

IV. 次年度に向けての課題

1. 動画教材については、次年度のリモート実習に備えて患者および家族の情報を追加し、さらに看護過程の展開に活用できるように内容を精練する。
2. 今年度の看護技術到達度が低かった項目に対しては、4年次の看護技術強化演習を通して補完する。

文献

- 一般社団法人日本看護系大学協議会. (2020). COVID-19に伴う看護学実習への影響調査結果. <https://www.janpu.or.jp/2020/12/11/17860/>. (閲覧日: 2021年2月9日)
- Kristine A. Moore, Marc Lipsitch, John M. Barry, et al. (2020). COVID-19 ; The CIDRAP Viewpoint: Part 1 ; The Future of the COVID-19 Pandemic; Lessons Learned from Pandemic Influenza. CIDRAP (Center for Infectious Disease Research and Policy) UNIVERSITY OF MINNESOTA.
- 葛原誠太, 室屋和子, 野元由美. (2013). 老年看護学演習における視聴覚教材活用の効果. J UOEH (産業医科大学雑誌), 35 (2), 173-182.
- 日本経済新聞. (2020). 韓国や武漢での新たな感染に懸念 WHO 事務局長. https://www.nikkei.com/article/DGXMZO58971630S0A510C2I00000/?n_cid=DSREA001. (閲覧日: 2021年2月9日)
- 佐藤栄子, 小野千沙子. (2016). 成人慢性期の事例を用いた看護過程演習における教育効果 - 紙上患者とDVD教材の比較. 足利工業大学看護学研究紀要, 4 (1), 11-19.

